

# 保育所実習で学生が獲得したもの

## A Student Obtained it in Nursery School Training

(2016年3月31日受理)

山本佳子

Yosiko Yamamoto

Key words : 自己課題, 適切な援助, 全体把握

### 要 約

保育士を目指して学んでいる学生は、必ず実習という関門を通過しなければならない。子ども学科での初めての实習と言うことで学生は大変緊張して保育所実習に望む。その結果学生が思い描いていた通りの収穫を得られた場合と、全く違った結果を突きつけられたり、実習途中で挫折したりする場合がある。そこで数年間の学生の実習の事前と事後を比較検討することで、学生は保育実習において何を獲得しているかを詳らかにし、今後の実習指導に活かそうと考える。

### はじめに

わが国の保育所保育において乳幼児の保育を行うことができるのは保育士資格修得者である。しかし最近是全国的に保育士不足が深刻化しており、特に首都圏では何らかの講習を経たり、何らかの教員免許を取得していたりする者でも暫定的に保育所勤務を許可している場合が多々ある。このような状況下であるが、保育現場では、忙しい中でも学生が保育所実習を無事終了し、保育に対するやりがいを感じて保育士として現場に貢献してくれることを願って実習に協力している先輩保育士が多い。このように、実習に協力的な保育士や保育所も多くある。しかしながら、いかに保育現場が協力しようと考えても、最近の学生の耐性の弱さなのか、それとも指導されたことが、うまく通じずに、保育への魅力や自信を無くすのか、実習後に進路の方向転換をしたり、以前抱いていた保育への熱意を失ったりする者もある。実習で保育士の仕事の過酷さや責任の重さを実感したり、学生自身の力量不足を突きつけられたりしたこともこれらの原因として考えられる。また待機児童解消の為に現場の労働条件

に大きな変化が見られるのも事実である。従って実習中に挫折したり、保育士資格は修得しても他の職場に就職したりするものなどが増加傾向にある。そこで、実習を終えた学生は実習以前に何を望み、実習後に何を獲得したと実感しているのかを調査検証し、保育士を目指して入学した学生が当初の目的を達成し保育士として社会に貢献できるために、どのような指導をしていくべきかを保育士養成者の立場で考える。

### 1. 保育所実習までに学ぶもの

保育所実習については、児童福祉法施行規則により履修すべき科目が大別して6種類のカテゴリーに分けられ挙げられている。つまりそれは「保育の本質・目的に関する科目」「保育の対象の理解に関する科目」「保育の内容・方法に関する科目」「保育の表現技術」「保育実習」「総合演習」である。さらに「保育実習」の中身として「保育実習Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習Ⅱ」「保育実習Ⅲ」「保育実習指導ⅡまたはⅢ」に細かく分けられている。これらはやがて保育士資格を取得した場合、次のよ

うな職場に勤務する可能性があるため。保育所実習以外に保育所とは異なった施設実習を必須としているためである。

ここで保育士が勤務可能な施設名を挙げると、助産施設・乳児院・母子生活支援施設・保育所・児童厚生施設・児童養護施設・知的障害児施設・知的障害児通園施設・盲ろうあ児施設・肢体不自由児施設・重症心身障害児施設・情緒障害児短期治療施設・児童自立支援施設・児童家庭支援センターと14種類が挙げられ、このような多岐にわたる職場で働くための基礎知識がいかに多くまた必要であるかが見て取れる。このような多くの本質と技術を短期間に習得するのはかなり困難であるが、その反面せつかく取得した保育士の資格が、わが国では決して高いものであるとは認識されていないことに保育士養成の一つの壁があることは否めない。

また、科目名は養成校ごとに微妙な差異があるが、保育の本質にかかわるものでは「保育原理」「教育原理」「社会福祉」「児童家庭福祉」「保育者論」などが挙げられ子どもや家庭・社会の全体的基本的な概要・基盤・現状を学ぶ科目が挙げられる。しかし、保育士養成者としては、基本を学んだうえで書籍や表面的な現状には見えてこない保育の本質である「子どもを愛する心」「保護者に寄り添う心」「現状を好転させるような手立てと実行力」などを学んで欲しいと願う限りである。このような心理的な部分は保育の対象の理解に関する科目である「保育の心理学」「家庭支援」などを通して深く理解できる様な指導が必要になる。次に保育の内容・方法に関する科目では、「保育課程」「保育内容総論」「保育内容演習」「乳児保育」「障害児保育」「保育相談支援」「社会的養護内容」などが挙げられる。これらは実際の子どもに向かって具体的にどうか関わるかという方法論になるが、これらも心の通った手法がとれるようになることが望まれる。

保育所実習までに学ぶべき科目についてその概要を述べたが、これらはある程度の時間制限の中で、座学と演習のみで身に付けることはかなりの努力が必要になる。保育技術は経験値が多ければ多いほど巧みになると言えるので、実践事例やDVD、学生自身の積極的な授業参加態度や自主的ボランティアなどで広く・なるべく深く学ぶ必要がある。養成者としては、学生のイメージを膨らませる様な具体例を中心に学びを進める必要があると

言える。そしてこれらの必須科目を学ぶうちに学生は少しずつ変容していく。

入学当初の学生は保育者を目指しているというだけで、その保育者とは「子ども達を楽しく遊ばせる人」といった淡い想像に立脚している。

しかし保育を学び始めると、保育士資格を修得するためにこのような多くの科目を履修し且つ内容も複雑であることに初めて気づき、こんなはずではなかったと後悔する学生もある。特に指導計画作成では、書けない学生が困惑する。次に保育士の資質には何が望まれているかを述べる。

## 2. 保育士とは

保育士とは児童福祉法第18条の4に「専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導をおこなうこと業とする者」とある。1999年の児童福祉法改訂で保母・保父と言う名称が統一され2003年には保育士が国家資格となった。つまり保育士資格を持たない者が名乗ることを禁止した名称独占資格となった。また最近では男性保育士がわずかに増加している。

保育士の業務は非常に多岐にわたっていることは前述したが、保育士の専門性と同時に保育士には倫理規定がある。つまり2008年の告示の保育所保育指針の第1章総則2の(4)には「保育所における保育士は、(中略)倫理観に裏づけられた専門知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」と記されている。従って保育士は倫理・知識・技術と判断力が必要になる。つまりこれは子どもの保育だけでなく保護者の子育て支援も保育士の大きな使命であると言えるのである。次に、保育所実習の流れについて述べる。

## 3. 保育所保育実習の流れ

まずは実習園を決定することから始まる。岡山県下の保育士養成校が連携して岡山県下の公私立保育所の実習先を支障なく配分する組織がある。これは全国的にも珍しい組織でありその有能性は高い。また県外の実習先へ

の依頼承諾等の経緯があるが、基本は学生の希望になるべく添える様な取り計らいを行うことが第一義である。多くの学生は自宅から通所できる範囲や、自分自身の出身園・職場体験園等を選択するが多い。

次に実習前に実習事前訪問で実習先に学生が出向き、どのような園の特徴があるか、何を準備すれば良いかを聴取し、養成校の担当者と相談しながら準備にかかる。このときに今回の実習で何を学びたいのかを実習の自己課題として、学生自身が考える。この段階で何を学ぶべきか全く目標が定まらない学生が多数ある。反面実習の手引書などを参考にして、実現不可と言えるほどの多くの目標を羅列する学生もある。そのような場合、自分ですぐ口をつけて述べられるものでないと、いつも意識できるものではないことを知らせ、本当に学びたいものを厳選させる必要がある。指導者の助言により3～4の目標を自分なりに掲げることで保育所実習への実感が少し湧いてくるのである。ここでそれらの代表的な例を数個、示しておく。

#### 自己課題例

「子ども一人一人の気持ちを理解できるようにする」

「保育所の一日の流れを理解する」

「実際に子どもに接する中で発達過程を学ぶ」

「保育士の声掛けの仕方を学ぶ」

「明るく笑顔で過ごす」

「年齢にあった指導案の書き方を学ぶ」

以上のような自己課題を掲げ、実際の保育現場に飛び込んだ実習生は、まず、第一段階として「観察実習」を経験する。これは慣れない環境下で2～3日は何がどうなっているのか、そのルーティーンを体感することから始まるが、ただメモ取りながら見学していれば良いというわけにはいかない。子ども達は常に動き、話しかけ要求を突き付けたりする。保育士は何かしながら臨機応変に即時に対応することが望まれる。このあたりでそのめまぐるしさについていけない学生や3日の観察実習で保育の流れが把握できない学生があり、実習担当者からの当たり前の助言に深く傷つく学生もある。

続いて3日も経験したなら、部分的に子どもを指導してみるのが良からうとして部分実習が計画され、その内容・指導案の提出が求められる。しかしこの予定は実習一か月前にすでに提示されているのであるから、準備を

きちんとしてきた学生は内容はともあれ、指導計画案は、持参できているであろう。

実習担当者の指導の仕方としては、大別すると二種類の指導法があると考えられる。一つは事前あまり助言せず、まず実行させて自分で感じ取らせるというものである。今一つは事前に事細かく助言し、何度も訂正の指導案を書かせ、かなり準備をさせてから実習を実行させるというものである。それぞれに意図はあり、どちらかの方法が学生の気質に合えば問題ないのであるが、合わない場合は即座に学生の自信喪失に繋がる。また、部分実習をした後の反省部分での適切なフォローがあれば学生の挫折は防げるが、忙しい現場ではそのような手厚いフォローは不可能な場合があることは否めない。

何とか第1回目の部分実習が終わり2回3回と続けられると、少しは実習生も手ごたえを感じることもあり、実習の最後の全日指導を経験する頃にはクラスの子ども達への理解や愛着が形成され、実習の終了期には子ども達と別れがたい絆が形成される場合がある。

最後に実習の反省会があり、事前に掲げた目標が達成されたか、残された課題は何かを明確にして保育所実習は一応完結する。以上保育所実習の流れを述べたが、次に学生が実際に実習の事前に掲げた自己課題と実習後に学生が実習から得たものについての調査結果を挙げる。

## 4. 実習結果の調査方法

実習前の自己課題と実習で学んだものを学生の実習後の報告書から集約し、表1～3に表した。紙面の関係でこれらの一部を文末に資料とし、まだ不十分な内容を今後の課題としている。これらは学生の報告書から読み取りキーワード凝縮して抽出した。例外的に学生によっては、自己課題に挙げていても、その答えを見つけ出す機会を逸したり、自己課題に挙げていたことすら意識せずに実習を終えたりした場合もある。表1は27年度、表2は26年度、表3は25年度の実習結果であり、ここでは各年度から20例ずつ無作為抽出し、計60例を論述の対象とした。

この調査結果から考察すると学生が保育所実習の事前に掲げた自己課題はかなり達成されていることがわかる。この「自己課題」「学んだもの」「今後の課題」を総

括することで保育所実習から得られたものとそうでないものが明らかになると言えるであろう。では次に詳細について述べる。

表1 実習結果の一部

整理	担当	自己課題	実習で学んだもの	今後の課題
6・1	0	環境	安全・清潔○ 発達に応じて○	言葉掛け
		生活	自主性を増すように指導○	細かい配慮
		子ども	発達過程に沿って指導○	全体把握
6・3	1	保育計画	保育計画の理解○	自己評価
		発達段階の理解	理解○	臨機応変の態度
		職業倫理	誤解×	
6・4	2	保育士の役割	安全○ 保護者への連絡○	信頼関係
		環境	安全○ 土曜日異年齢への配慮○	
		言葉掛け	場に応じた言葉掛け○	
6・5	2	環境	安全・快適・新鮮な遊び○	全体把握
		子ども	発達や個に応じた指導○	
6・6	4	環境構成	安全・温度調節○ 乗り物コースの設定○	正しい言葉
		子どもへの配慮	肯定的な言葉掛け→自立へ○	全体把握

### 5. 自己課題について

学生が実習前に立てた自己課題の3年間分を図1～3のグラフにして表す。学生が知りたい、体験したいと思っていることは、年度によって多少の差異はあるが「子ども理解」・「言葉掛け」「適切な援助」・「保育計画」・「発達理解」・などが代表的なものとして表れている。

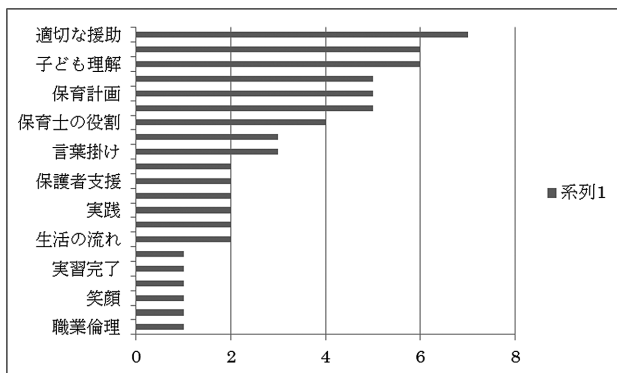


図1 27年度の自己課題

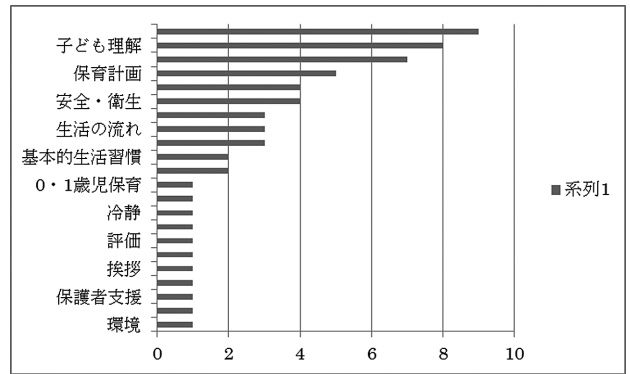


図2 26年度の自己課題

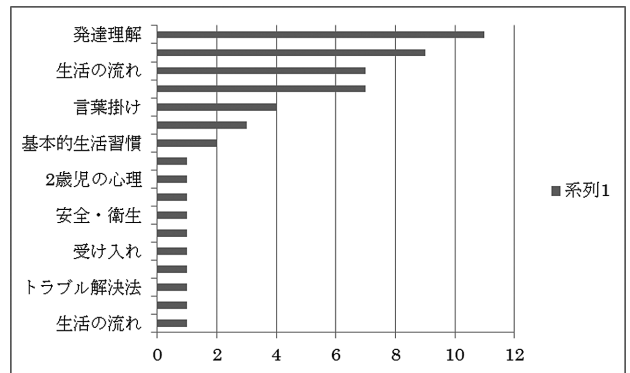


図3 25年度の自己課題

### 6. 実習から得られたもの

次に自己課題に対して実習中に理解できたかどうかを課題別に3年間の結果を合算して、以下の図4～8のグラフに表した。数値は%で表記した。

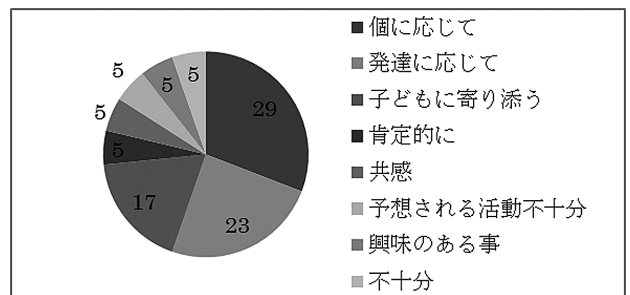


図4 子ども理解に対する実習で得たもの

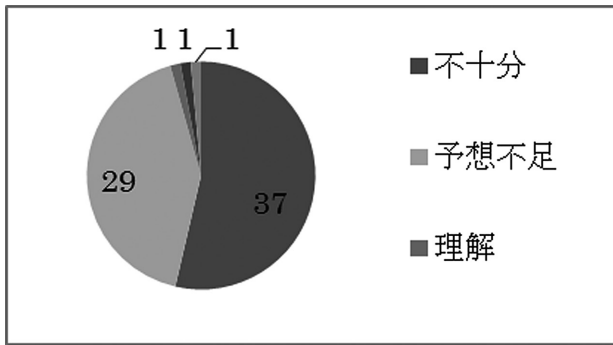


図5 言葉掛けについて実習で得たもの

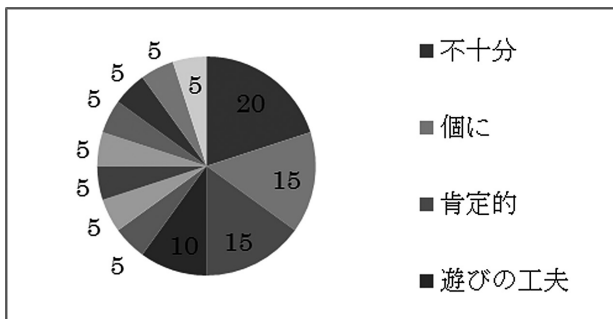


図6 適切な援助で実習で得たもの

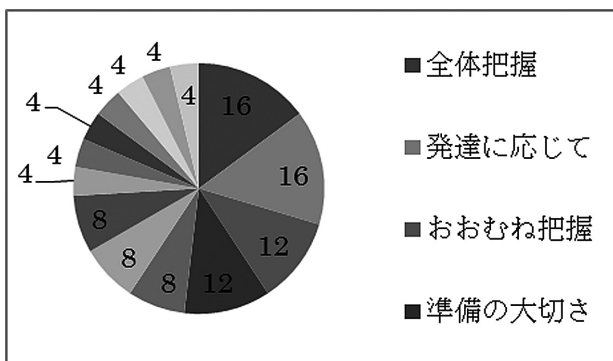


図7 保育計画について実習で得たもの

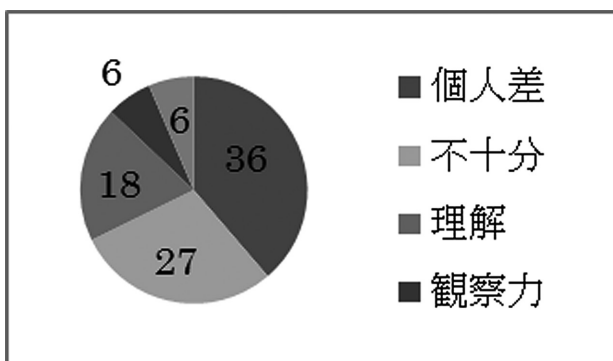


図8 発達について実習から得たもの

以上の結果から不十分なものもあるが何らかのヒントや手応えを得たことが分かる。そこで本当に不十分なものは今後の課題を集約することで表される。

## 7. 実習生の今後の課題について

実習後の今後の課題について分析したところ以下の図9の結果が得られた。このグラフから読み取れるものの中で一番多い「保育内容」の意味は、実習前に指導案を書き、準備したはずであったが、実際に保育をしてみると自分が考えていた保育内容はあまりにも薄く、1日分にも満たないことが分かり、実習後半の全日実習時にはほとんど手詰まりといった学生が多く、保育内容を多く学習すべきかが如何に反省されたようであった。また2番目の「全体把握」では、自分の指導計画によって保育を進めようとするばかりで、クラス全体に目が行き届かず、また子どもの反応を感知することもできていない学生が多いということを示し、ほとんどの学生が指導者から注意される事項である。保育は経験値が必要になるので致し方ない部分もあるが、こればかりは経験を積み重ねていくしかないと言える。また3番目の「保育準備」はほとんどの学生が不十分であったことを痛感している。これは保育計画、環境構成などにも関連し、細かい援助が考えられていればすぐに改善できることであろう。また次の「時間配分」についても保育になれない内は、時間を意識することが出来ず、遊びが中途半端になったり、昼食が遅れたり等さまざまな失敗に通じ、学生が後悔を余儀なくする事柄である。「健康管理」以下の項目は量的にもわずかであり、個人的な課題として考えるべき内容になる。また「発達」についてを今後の課題にしていない学生が多いのは、子どもと触れ合うことでなんらかの手応えを感じたものと理解できる。

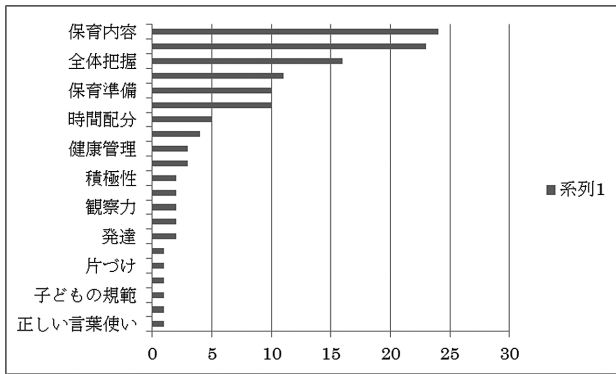


図9 実習後の今後の課題

## 8. 考察

さて3年間の保育所実習の結果から、保育所実習で学生は何を得ているのかというテーマにおいて、学生一人一人は自己課題をある程度は達成したと言えるが、理解の深さや実践力につながったのかというと20日間の実習では、その効果は薄いものと考えられる。しかし、ただ漫然と実習に臨むのではなく、自分の実習の目標をある程度達成したということは、今後の学びに大いに役立つと考えられる。

## 9. 今後の実習指導での重要事項

三年間の保育所実習の結果を概観したことで今後の実習指導に必要な事項は、もっと多くの保育に関する保育内容の知識と実践体験が必要であるということである。これらは、ある程度文献などからアイデアを吸収することはできるが実際に学生自身が子どもの前で説明し、一緒に遊び、トラブルを解決していくためには、模擬保育だけでなくボランティアなどで経験を積むことが重要である。また時間配分や保育準備では、いかに子どもの姿を想像して、多くの援助や配慮を思いつくかということが大切になる。大学生は自主的に学ぶのが本意ではあるが、実習前に多くの指導案を書き、実習準備ができるように教員が課題を多く与えることも必要であろう。そして磐石の準備をしたことが、困難場面に遭遇しても精神を安定させて、実習を挫折せず完結できるであろうと考える。

資料： 27年度・26年度

番号	年齢	自己課題	実習で学んだもの	今後の課題
5・2	0	子ども理解	子どもに合った言葉掛け ○	トラブル原因を考える
			子どもに寄り添う○	
5・2	2	保育の流れ理解	子どもを認める○	声掛け 気持ちの表現
		暗線面・衛生面 トラブル対処法		遊びを増やす
5・3	2	発達	信頼関係○	観察力
		3 保育環境	声掛けの工夫○	肯定的な言葉掛け ピアノ練習
5・9	1	信頼関係構築	保育士の仕事の幅広さ○	時間配分
		言葉かけ 子ども理解	遊びの工夫○	注意の仕方
5・12	2	発達過程 保育方法	子どもの気持ちに寄り添う○	適切な援助
		言葉掛け	視覚に訴える○	保育準備 配慮
5・13	5	言葉掛け 指導案	言葉掛けの反省×	即時の応答
		安全 子ども理解	予想する活動を詳しく考えておく×	子どもに合わせる
		適切な援助	安全面の配慮と工夫○	平等に関わる 行動
5・15	2	子ども理解	子ども理解はできていない×	積極性
		3 保育計画 観察 評価	子どもに合った声掛け○	読み聞かせ
		積極的に動く		挨拶
5・17	3	基本的な生活習慣	発達過程の理解○	準備 片づけ
		衛生・安全・情緒の安定	準備の大切さ○	遊びの種類を増やす
		保護者との良い関係		保護者対応
5・18	1	声掛け	信頼関係○	健康管理
		保育計画	細い考慮×	子どもの気持ち理解 全体把握 遊びの種類
5・19	2	子ども理解 成長観察	月齢差○	適切な援助
		規範になる態度	見守ることの大切さ○	積極的に関わる
5・20	3	保育方法 声掛け	声掛けが少なかった△	子どもの気持ちを落ち着ける
		子どもの興味理解	子どもに合わせた対応が出来なかった△	造形の段階 応用
		適切な援助	見守ることの大切さ○	柔軟な対応
5・21	2	冷静に	導入の大切さ×	経験を積む
		指導計画	保育準備の大切さ×	
		楽しむ		
5・22	1	挨拶	ダンスなどしっかり覚える×	指導力
		3 報告 連絡 相談	視覚に訴えて知らせることの大切さ	ボランティアなどで経験
		ねらいの設定	トラブル解決法×	
5・24	2	0・1歳児の保育	ゆったりと遊びを展開○	
		4 信頼関係の構築		
		声掛け		
5・25	3	発達課題	全体を見ることの大切さ×	子どもの立場で考える
		子ども理解	子どもに寄り添う△	子ども主体の保育
		信頼関係	活動のねらいをもった指導×	全体把握
5・27	0	声掛け	発達の差○	遊びを多くする
		臨機応変	善悪判断×	声掛けを多く
		5 興味の引き方	活動の見通しが必要×	全体把握
5・28	2	一日の流れ	広い視野で指導×	全体把握
		3 発達課題を学ぶ	保育準備の重要性×	見通しを持った保育
		生活習慣のための援助	適切な援助△	
5・31	2・3	発達	日誌・指導案×	指導案の書き方
		4・5 一日の流れ	適切な援助×	子どもへの規範なる事
5・36	2	保育士の仕事	保育内容 保育業務○	保育準備
		4 適切な援助	発達に合った援助○	安心楽しい保育
		声掛け	善悪判断× 意欲を増やす言葉掛け×	
5・40	1・2	子ども理解と指導	低年齢児への声掛け△	子ども一人一人にあった
		3・4・5 発達	トラブル解決法×	声掛け
		安全で心地よい保育環境		

以下省略

## 参 考 文 献

1. 厚生労働省 「保育所保育指針」
2. 厚生労働省 「保育所保育指針解説」
3. 厚生労働省 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」
4. 林邦雄・谷田貝公昭監修 『保育実習』(株)一藝社  
2012, 8, 10
5. 開仁志 『保育現場と養成校のコラボレーション! 実習生指導サポートブック』2013, 9, 10 (株)北大路書房
6. 近藤幹夫 『保育とは何か』2014, 10, 23 (株)岩波書店

